

若き日の思い出

(青春時代)

ワンス・アポン・ア・タイム

下関市医師会 塩見 祐一

○～・イン・ハリウッド

これは2019年公開のクエンティン・タランティノー（他にこの監督特有のドギツさ一杯の「キル・ビル」あり）の作品で、上映時間が181分の長さだ。落ち目のスターに扮するレオナルド・ディカプリオと彼のスタントマン役のブラッド・ピットが1969年に起きたシャロン・テート事件を背景に繰り広げるストーリー。僕としては今をときめくこの二人は好きでない。ディカプリオは不肖・ワタクシメに似て顔が四角く広いからだし、ピットの方は先妻のアンジェリーナ・ジョリーが嫌いだからだ。ソウ、中条きよしが歌った「理由」の歌詞♪～あの一と別れた理由は何でもないの～と同じで、俳優の好みなんて僕の場合は単純そのもの。映画は趣味だし気を張って見るものじゃないと思っている。

そんなふうに「何でもない」といかないのが、受験だ。かつて冥府魔道（萬屋錦之介の「子連れ狼」）の受験道に勤しんだ身には、というのが、この1月に続けて起きた、東大校門殺傷事件の高校2年生&再受験のための共通テストでカンニングをした女子大生である。余りに子供じみていたとはいえ、あそこまでやる行為は絶対に許されない。まあ、ソノ追い込まれた心情は分からなくもないけれど。そんな心得違いに嵌まりそうになった時には、僕が好きなイソップ寓話の“酸っぱいブドウ”の“負け惜しみ”、or、ニーチェの説く“ルサンチマン”の“やっかみ”をするに限る。そう心の中で念じればあんなにまで突き進まなかったろうに。それでも諦めきれなければ、僕だったら「もし万が一東大理Ⅲに入ったって、あ

るいは、今さら有名私大へ入り直したって、きっと今より大変！」と考えてみる。

さて、映画でのシャロン・テート役はマーゴット・ロビーで、ちょっとイメージが違った。テート本人は当時ロマン・ポランスキー監督（父親はユダヤ系ポーランド人、代表作に怪奇映画「ローズマリーの赤ちゃん」あり）との間で妊娠8か月の身重だった。「お腹の子だけは助けて！」とチャールス・マンソン率いるカルトファミリーに懇願する。それが反対に実行犯のスーザン・アトキンス（後に脳腫瘍で獄中死）の妬みの火に油を注いでしまう。全くの偶然だろうが、日本にも同じ亡くなり方をした連合赤軍副委員長・永田洋子がいる。

今からちょうど半世紀前の1972（昭和47）年のこと。いくら時代がどうのと言っても、永田らはとんでもない浅間山荘事件を起こした。続いて、ソレに至るまでの本当におぞましい集団リンチも判明した。たとえ倫理上“罪を憎んで、人を憎まず”といったって、刑法上“心神耗弱”としたって、♪「悲しくてやりきれない」（サトウハチロー作詞）につきる。

あこのころの僕なんてノンポリどころか、医学部に同時入学した妹と一緒に進学課程が終わり・専門に入ってまでは窮屈でゴメンと“休学中”の今言う“ニート”。そして、受かる望みも無い公認会計士二次試験勉強に日々ウツツを抜かしていたイヤな奴だった。だから彼らの行動はさておき、その思想に対しトヤカク言う資格なんてないけれど。

他方、同年には主演・中村敦夫の「アッシには

かかわりのネーこって」が流行ったTV「木枯らし紋次郎」の放映もあった。毎回この決め台詞はドラマの最後になると、どこへ行ったの?と思われるほど、主人公は周りの人々にのっぴきならないかかわりを持ってドスを抜きまくるのである。

○～・イン・沖縄

この度の新型コロナ変異株・オミクロンによる岩国と沖縄への第6波は米軍基地発だ。大体PCR検査なしの駐留軍人派遣なんて信じられない。こんなヒトツ跳びの世界なのに。

僕が昔、沖縄で働いていた診療所は基地で有名な嘉手納の隣・Y村字都屋の在だ。その隣の字が楚辺。そこのバス停にトリイステーションがある。トリイという変わった呼び名は何のことはない、基地の入口に鳥居があるからだ。停留所前にレストランがあった。お店の看板メニューは“タコスインチラータ”で、看板娘は僕がここに来る前に勤めていたM病院・外科病棟の若い看護婦Kさんだった。引越して来たばかりの僕はそのタコスを食べに初代事務長のAさんと店へ入った。出会いのトッカカリに「ここのお嬢さんはM病院じゃチュラカーギ(美人)でデキヤー(仕事ができる人)って評判でした」と教えてあげた。明るく日、Aさんは何を勘違いしたのか、彼女のお母さんに「診療所へ今度来た先生が娘さんとお付き合いしたいらしい」と言ったんだと。即刻、「うちの子には交際中の彼氏がいます!」と返事をされ「先生、諦めてくれ!」口調。あまりのアホらしさで怒る気も失せるほど。恥ずかしくって、以後、一人でそこへ食事をしに行くことはなかった。

Y診療所に隣接して障害者施設“救護園”があり、僕はそこの嘱託医もしていた。とある日、T園長が「日ごろお世話になっているから」とコザ近くの基地内・将校用レストランに案内してくれた。入ると直ぐ園長はチップを渡していた。この郷はアメリカなのだ。出てきたステーキたるや、大きさ&厚さは厚底スリッパ並みだが、味は大味というかソースが美味くない。もっとも僕がアダナで“ウッシ(牛)一”と呼ぶY村助役は「肉は塩で食うのが一番!」だと。週一のコザの“大

関”や月一の浦添の“ハナンドーズ”にととても及ばない。後者では、昔見たTV「非情のライセンス」の天知茂(くも膜下出血で急逝)ぶってワインをボトルで飲んでいたので、将来いつかギュウツというメに遭うんじゃないかと心配はした。

基地からの帰りは、“救護園”へ出務の際に仕事の手配をしてくれるY看護婦さんの車が待っていた。車がコザにさしかかった時、後ろからドスンと来た。Yさんが「ヤラレタ!」と温かな女性に似合わぬ声を発した。追突してきた車は白人3人が乗っていた。交差点の四方八方から仲間の車が押し寄せてくる。多分車内から緊急召集したんだね。ここで女人を守らなきゃ男が廃ると僕も外へ。多勢に無勢、アメリカ兵集団が僕たち二人をグルリとストーンサークルのように取り囲む。吉本新喜劇の池乃めだかじゃないって。普段の彼女とは思えぬペラペラ英語で長い押し問答後、「必要な書類を取りに基地へ帰ってくる」と申し出るので一旦手打ちとなった。しかし、オットドッコイ!基地近くになると猛スピードを上げて中に逃げ込む。後に残ったのは彼女の車の凹みと僕の“ムチ打ち損傷”だった。

2 years later、旧Y飛行場跡地で村を挙げての“基地反対闘争”があった。僕も率先して参加。力の限りの声と握りこぶしを天に向けた。少しはコザでの意趣返しになったかも。イヤイヤ、ここは若さの“叫び”としたい。先日亡くなったあの石原慎太郎でも若いころには「雲に向かって起つ」(映画は石原裕次郎、TVは北大路欣也が主演)なんていう政治を正す熱血新聞記者を書いていたんだもの。高校生だった僕はその小説を読み始めると止まらなくなり、一睡もせず読んだことを憶えている。小説だけじゃなく、あのころの歌舞音曲ならどれも夢中になれたが、昨今の大晦日・紅白歌合戦で聞かされるのにはサッパリついていけないワタクシメになってしまった。

むすび。あと1週間で医療保険が山口県医師国民健康保険組合から山口県後期高齢者医療広域連合へ変わる僕にも、確かに、僕なりの青春があったんです。